

浪江の

# こころ通信

・第1号・



## 官民協働による “浪江のこころプロジェクト”が 始まります！

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。



「浪江のこころ通信」第1号への感想をお寄せください。

【連絡先】福島県二本松市郭内一丁目196-1男女共生センター内「浪江のこころ通信」宛 FAX.0243-22-4261



## 吉田 康正さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 松原

猪苗代町の中心部から車で30分ほど離れたところにある沼尻温泉には80人ほどの浪江町民が避難している。そのうちのひとりが、元カラオケ店勤務の吉田康正さんだ。



▲「みんなで戻って、浪江町を元気づけよう！ ななし（ロッククライミングの仲間）のみんな、がんばれ！」

### ■避難するまで

吉田さんは趣味のロッククライミングの関係で、地震が起こったときには福島市内のジムにいた。あわてて帰った自宅は地震によって大きな被害を受けていたものの、家を片づける余裕もなく車2台で避難することになったという。

吉田さんは、まず横浜の親戚の家に2週間いたが、近くのアパートを借りようとする「福島の人には貸せない」と言われ、また横浜では浪江町の情報がまったく入らないこともあり、3月末には同じ行政区の住民が避難する猪苗代町の方へ移ることにした。

はじめは体育館での一次避難だったが、4月15日からは沼尻温泉の田村屋旅館で二次避難をしている。

### ■避難所での生活

避難所では朝昼晩とご飯が出るため、どうしても何もせずには部屋に閉じこもってしまいがちになる。そこで吉田さんが大切にするのは、とにかく外に出て気分転換をすることだ。

スキー場でワラビなど山菜を採ったり、山で趣味のロッククライミングをしたり、車で買い物に出かけたりと活発に動かれています。吉田さんは、「じつと部屋に閉じこもっていてもしょうがないし、考えてもなるようにしかならないから、割り切ってここでの生活を楽しむ気である。」という。

吉田さんは、旅館の自治会の副会長もされており、自治会で声かけやカラオケ大会をするなどして、ひとりになる人が出ないように心がけをしている。

### ■地域のつながり

沼尻温泉では同じ行政区の人が集まって避難しているので、知り合いがいらないわけではなく、かえって浪江町にいたときよりも会う機会が増えたほどだという。そこで吉田さんが心配するのは、せっかく一緒にあった町が仮設住宅に入ることでばらばらになってしまうことだ。吉田さんはスーパーの近さから福島市内の入居を希望しているが、人によって希望すると



▲避難している田村屋旅館

ころは違ってくる。また、一度仕事を始めるとその場所での新しい生活が始まるので、浪江町には戻りにくくなる。そのため、いつそ避難所の生活の方がいいのかもしれないとも言われていた。

吉田さんは、浪江町に帰ることを半ばあきらめかけている。浪江は生まれ育った町であり、先祖代々の墓もあるので、死ぬまでには浪江町に帰りたいという思いも強い。だから、もし帰れたときには、近所の人とあいさつを交わし、浪江で仕事をするという地震前の生活を取り戻したいとも思っている。ただ、すぐに帰れるわけではないので、今は与えられた環境を楽しみ、ことごとくぐらしかできないとあきらめがちに話していた。

# 浪江町民として、100まで生きたい！



福島県

## 鈴木 静子さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 鈴木



### ■ 人生のつらさを乗り越える 「生きていてよかった」

3月11日は、夫の四十九日で納骨をすませ、その後に震災が来ました。避難当初は体制が整っておらず看護師という職業柄、何かあったら看に行くこともしていました。

3回目の避難先に移り、医療面も安心できる状況になってきて逆にやることなくなり、生きがいを感じられなくなっていました。

若いころに結核を患い生きる目的を感じられなくなり、自殺を図

ったこともありました。その闘病経験と、後に看護師になりたくさんの方々とお会いでき、いろいろな経験をさせていただいたことを「生きていてよかった」という題で、老人会や看護学生などに向けて話をしてきました。

震災があり、避難生活の中で、夢も希望もなくなっていたけれど、ふり返ってみるとつらいことは、そのままずっと続くわけではない、必ず乗り越える時期がある。死ぬのはいつでもできるけれど、生きていかなかったら…。

みんなと一緒に、浪江町民として、100まで生き、浪江で楽しく一生を全うしたいと考えています。

### ■ 避難生活で感じる、 寄り添う看護の大切さ

以前、県立病院の総看護師長をしていた折には、神戸の震災時に看護師派遣をしましたが、実際に被災者側になり、被災地での看護の難しさを改めて感じています。

他県などから派遣されて避難所を訪問してくださる看護師さんもどう被災者に接して良いか戸惑いながらの様子が見られ、時にはうるさがられている場面もありました。

浪江では、訪問看護を行っていたので、リハビリの支援指導の経験を活かして気付いたときに声をかけ、アドバイスしたりもしています。

寝たきりにならず、健康第一で、みんな浪江に帰りたいと願っています。

### ■ 地場産業の夢 豊かな浪江

自然や虫が子どもころから好きで、趣味が高じて天蚕（てんさん）の飼育をしていました。天蚕を使った化粧品は福島県の特許にもなり、「浪江で天蚕を地場産業にしたら」と提案したこともありました。毎年、天蚕の卵を霊山の天蚕の会に届けていましたが、今年はできませんでした。

浪江のきれいな川ときれいな海、資源豊かな山がそのままであってほしいと思います。

最後になりましたが、津波でご家族や家のすべてを失われた方々には、心より哀悼の意を表し、お見舞いを申し上げます。叶うならば以前の浪江のようにきれいな川と海、そして資源豊かな山が戻ってくることを願っています。



## 八島 貞之さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 鈴木

### ■子どもたちの生活

現在は、義務教育中の子どものいる世帯専用の二次避難所で生活しています。それまでは、私の両親も一緒に生活していたのですが、子どもの祖父母は入居対象ではないとのことから、両親とは別のところで暮らしています。本当は孫の成長を身近に感じてもらいたいが、暮らしてほしいのですが、できないのが忍びないです。

二次避難生活は、一世帯一部屋で生活しているので、子どもが午後9時に寝た後など部屋で仕事ができないのが不便です。

### ■浪江町民をつなげる

#### 浪江の焼きそば

商工会の青年部長時代から、みえ焼きそばで町おこしをする取り組みを行っていました。もともとこの焼きそばは50数年前に、その当時、地域が貧しくて漁業も農業も重労働で大変だった時代、安く食べ応えがあるものでみんなを元気にしたいという気持ちで、ある食堂が考案したそうです。

今、町が大変な状況ですが、当時の思いと同じくみえ焼きそばで復興を手助けできたらと思っています。本来私たち青年部は、先頭に立って復興のお手伝いをしたい

のですが、町が立ち入り禁止のため、何もできないのが悔しいです。唯一できることは、浪江町の町おこしを続けていくことだと思っています。それをやっていけば、心の復興につながっていくのではないかと。だからやろうと決めました。

4月29日～5月8日、安達ヶ原ふるさと村でなみえ焼きそばを5000食ぐらい出しました。浪江の人たちが集まって長い時間並んで待つてくれて、暖かい言葉もかけていただきました。

「みんな頑張ってるから、懐かしい焼きそばを食べに来たよ。」

「頑張れよ！」などみんなに元気を届けるつもりが、逆に元気をいただいたと思います。

今後、まだまだ食べられない人も多いので、焼きそばを出す機会ができたらと考えています。売上は義援金などにしたいし、町民が集まれる場を作っていきたいです。

### ■町に帰ったら

自分の仕事である建築業で町の復興を手助けしたい。そのためにも、浪江の中小企業の今後の補償をいち早くしてほしい。浪江には中小企業が多いので、そのことが無いと、町に戻ったときに事業が

再開できなくなることが心配です。

### ■青年部の仲間たちと

今会いたいのは、ともに町おこしのために汗を流した商工会の青年部の仲間です。町おこしをしなから友情や信頼関係を深めていきました。それはお金には変えられないものです。

町民の皆さんや仲間と1人も欠けることなく、みんなで町に戻って力を合わせて復興に取り組みたいの思いです。



## 芹川 輝男さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 北松



福島県



▲芹川輝男さん。7月から「杉乃家」を再開させる。

避難生活が始まってから3カ月経つけど、最初のうちは家族もばらばらで、車中泊をしたり、移動も多くて大変だった。今は二次避難所で少し生活が落ち着いたけど、個室で分かれてる分、部屋にこもりつきりにならないように気をつけてる。特に今、力を入れてるのが体力づくり。朝9時半から4時間かけて、避難所の裏にある磐梯山に登ってるよ。頂上目指してひとり登るんだけど、てっぺんに着いたときは気持ちいい。ほかにも、避難所の周りに史跡がたくさんあるからちよくちよく見に行ったり、お風呂にゆつくり漬かったりしてる。こうやって毎日外に出て運動したり、周りの人としやべると気分転換になっていいんだ。

浪江町では食べ物屋をやっているけど、地震の後はずっと休業。

それが縁あって、二本松の駅近くに7月1日からお店を開けることになった。お店の名前は前と同じ「杉乃家」。メニューは、やっぱりなみえ焼そばと、得意の特大エビの天丼や、若い人向けのラーメンだな。自分は幸運にも仕事を始める機会をもらえたけど、今はまだ仕事が見つからない人もたくさんいる。自分はもう年だけど、自分がお店を開いているのを見て、若い人たちが「負けらんねえ！」って元気を出してくれるとうれしい。

浪江町は本当にいいところ。何がいつて、季節の行事がたくさんあったり、漁港があるから、魚がいつも新鮮でうまい。町おこしにも力をいれていて、大堀相馬焼の器でなみえ焼そばを売り出して、これが最近ちょうど波に乗ってきたところ。でもなにより自慢できるのは、人の良さや、人情の厚さ。これはどこにも負けないと思う。

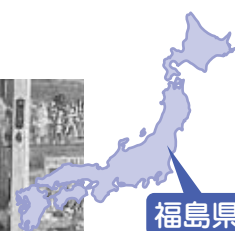
地震で元の生活が一変したことショックは本当に大きいよ。浪江はみんながばらばらになっっているし、この状況ですぐに顔をあげて、前を向いて、なんて難しい。今は一日一日、本当に大変な時をみんなが精一杯過ごしてる。でも、いつかはきっと、みんなで浪江に戻る日がくるって信じてるよ。「がんばっぺ、浪江！」今はこの言葉で力を合わせていきたい。

今はいろいろ大変だけど、悪い部分だけでなくいい部分も見ないと。よく考えると今は毎日温泉に入れるっていう夢みたいな環境にいる。旅館では知らない人ばかりだけど、毎朝散歩していると自然と知り合いもできてきた。この間は花見、今度は温泉まつりがあったりして、旅館もいろいろしてくれる。

浪江にいたころも津島で毎年お祭りをやっていた。自分で焼き肉を出店したり、歌手を呼んできたりして、町に頼らずに自分たちでやっていたのが自慢だった。

床屋をやっていたから、帰ったらまずはお客さんの顔を見たい。でも津島は放射線量が高くて子どものいるところは帰りづらいから、昔の津島には戻れないかもしれない。でも、20キロ圏外なのでたまに家に帰ると、今までは何とも思ってた風景がどこか安心して見えてくる。

とりあえずの目標は、仮設住宅に入って床屋をやること。店名は「ヘアーサロンさんぺい」だったけど「ヘアーサロン浪江」とかにして、みんなが集まって浪江の話ができる場所にしていきたい。二本松市の仮設住宅に入居予定だから、常連の人に開店したら知らせたい。



福島県

## 三瓶 友一さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 松原



福島県

## 森野 珠美さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 大木



▲森野さんと娘の真奈ちゃん(3歳)

町の臨時職員で少しだけですが、震災の手伝いをしてから次の朝、帰宅するとすぐ避難命令。すぐ帰って来ると思い、家の中を片付けられないまま、慌てて避難しましたが、もう3カ月近く家に帰っていません。川俣道の駅で車中に2泊して、それから親戚や避難所の体育館に避難。4月17日から今のホテルで避難生活をしています。

子どもたちも学校に入り、放射能も気にせず、学校活動に励んでいます。今度、仮設に移動すると一学期で3回も転校するので、子どもたちがかわいそうに思います。

今は、原発事故で浪江にいつ帰れるのか、先のことから分からないため、いつまで二重生活をしなければならぬのか心配です。浪江の自宅にあった物をまた買うとき「これ、あるのになあ」と思いながら買うのがときどきあります。

十日市や大堀相馬焼など浪江のお祭りや名物が消えていくのはとてもつらいし寂しいです。ときどき帰宅して生活をしている夢をみたり、3歳の娘に「お家に帰ろう」と言われることもあります。

浪江に帰ったら家の片付けとお墓参りをしたい。県外に避難した友だちに会いたいし、子どもたちも友だちに会わせてあげたい。

帰るときは、みんなで一緒に浪江に帰りたい。そのときのために、今は大変だけど力を合わせて乗り切りましょう！

地震直後は津波を警戒してお墓のある高台へ逃れ、その夜は近くの北棚塩集会所で夜を明かしました。翌日の朝に原発事故の情報を聞き津島中に退避。その後、避難所を転々として4月7日から磐梯町七ツ森のペンションに世話になっています。

一番つらいのは、部落の中で津波により11名が死亡し、まだ2名の行方不明者がいることです。原発事故により捜索が遅れているため、一日も早く安否が判明してほしい。

亡くなられた方の中には、湛水防除管理者の鈴木謙太郎さんのように、部落を救うためみんなが避難する中を海岸の排水機場へ向い、津波にのまれ亡くなられた方もいらっしゃいます。本当にお悔みの言葉も見つかりませんでした。

6月4日に一時立入りで部落に行きましたが、ほとんどの家屋が流され、囲いの木さえもなく、ただただ荒涼と遮るものもなく、広々とした故郷の姿に呆然としてしまいました。

それでも部落に帰れば復興のことも

考えられるかもしれませんが、いつ戻るのかも分からない状況では、見通しも立てられません。そこには原発事故にも見舞われた浪江町の他地区にない苦しみがあります。安全神話の崩れた原発事故の一日も早い収束を待っているのみです。

南棚塩では、貴布祢神社や地蔵尊の行事、盆踊り大会、パークゴルフ大会などでみんなが集まったものでした。これらは避難先での実施は困難です。

いつになるか分かりませんが、故郷で再び開催し、みんなで楽しく暮らせる日を夢見て、頑張っていきたいと思います。



福島県

## 舛倉 勲さん

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 中山

また会う日を楽しみに、それぞれの場所へ前に進んでいくしかない



## 小野田浩宗さん

(ヤングプラザスポーツ少年団団長)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 大林



「やっぱり、全国大会に出よう。」4月30日、綱引きで全国制覇を目指すヤングプラザスポーツ少年団(以下、「スポ少」)の子ども・父兄・指導者で話し合いを持ち、8月7日に東京で開催される全日本ジュニア綱引選手権大会への出場を決めました。最初は、12人のメンバーが県内(福島、飯坂、二本松、いわき、裏磐梯、猪苗代)と県外(埼玉、千葉)にばらばらに避難しているので、「出場を断念せざるを得ないかもしれない」という思いもありました。しかし、話し合いに参加した誰もが、スポ少が全国の舞台に立つことを望んでいることがわかり、練習量の不足や金銭面の負担などの制約を承知の上で、みんなで出場を決意したのです。

ありがたかったのは、各地からの支援でした。大会参加をバックアップしてくださっている日本綱引連盟、県綱引連盟、そして県綱引連盟猪苗代支部の方々。関東に避難している子どもたちを練習に参加させてくれ

ている佐川急便(スポ少OB勤務)の綱引きチーム。ここには書ききれませんが、その他たくさんの方々を支えられ、今では週に一度の地域別練習に加え、月に一度の全体練習ができています。

練習時間は以前の3分の1になってしまいましたが、子どもたちは、限られた時間を大切に、心をひとつにして頑張っています。チームには、練習不足を補う絆が生まれつつあるのです。

綱引きに限らず、避難生活の制約の中で子どもにも我慢を強いる状況が数多くあります。しかし、私たち大人の役割は、少しでもそうした状況を改善し、子どもたちの一度きりの“今”が輝くような環境をつくることだと思います。たしかに、先の見えない生活の中、不安を挙げればキリがありません。しかし、そんな時は「心～まずは一勝～」というメッセージが刻まれたスポ少の団旗を思い出して、一步一步前に進んでいくんだと自分に言い聞かせています。

8月7日、皆さんへの感謝を胸に、「まずは一勝」の精神で、全国大会に臨みたいと思います。離れていても、皆さん一人ひとりのご声援がスポ少の力になりますので、応援よろしくお願いいたします。

僕は、震災後3日目に親戚のいる群馬県伊勢崎市に避難してきました。それからは、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にずっとこのまちに住んでいます。今、通っている小学校に福島県から避難してきた人は僕ひとり。だけど、新しい友だちがたくさんできました。「マヒロ!」と友だちが僕の家までいつも誘いにきてくれます。休みの日は朝から夕方までずっと楽しく遊んでいます。6月5日から横浜や鎌倉への修学旅行も始まります。



▲麻弘くんのおばあさんが取材者のために作ってくれた手芸品。

この前、関東に避難している浪江町の友だちと東京・上野で



## 長竹 麻弘くん(小6)

取材：高崎経済大学 櫻井常矢研究室  
櫻井・山下

### 浪江小の校歌を忘れたくない

会いました。懐かしかったし、できたらもっとたくさん浪江の友だちと会いたいです。みんなはどこにいるのかな。担任の井戸川先生にも会いたいな。

こっちの小学校の校歌を歌うたびに、なんだか浪江小の校歌を忘れてしまう気がして、一度お母さんと大きな声で浪江小の校歌を自分の家で歌ったりもしました。以前のように浪江の中央公園で野球をしたり、剣道や習字を習ったり、サンプラザに買い物に行ったり、浪江町に帰って普通の生活がしたいです。それまで家族と一緒に助け合っていたいです。来月からは、僕が得意な習字の教室に通って元気に頑張っていきます。



群馬県

# 坂本秀一郎さん・由里江さん

取材：高崎経済大学 櫻井常矢研究室 櫻井・山下

## 「浪江のこころ通信」で故郷へのこだわりを育みたい

私たちは、震災後、福島県内を転々としながら親戚を頼って群馬県高崎市にきました。現在は、公営住宅に家族5人で暮らしています。

私は仕事も得ましたし、小学2年生の子どももこちらの小学校に馴染んでいるので、しばらく高崎市での暮らしが続くと思います。やっぱり子どものことが一番大事ですね。

周囲には、福島・浪江から来ている人はいないようなので、孤独ではありますが、こちらでは地域の区長さん、民生委員さんはじめ周囲の方々がいろいろと声をかけてくださります。時折、野菜などを持ってきてくれたり、バーベキューのお誘いなどもいただきます。とても親切でありがたく感じています。

ですが、やっぱりふるさとの浪江町を思い出します。浪江の海、請戸地区の安波祭、

新鮮な魚料理、地酒の寿などが懐かしいです。

浪江の自宅は津波で流されましたが、いつか必ず浪江に帰りたいと思います。たとえば、もとの土地に住めなくても、どこかに浪江の皆さんがまわって暮らすこともあっていいのではないのでしょうか。知っている者同士が一緒にいれば、元気に頑張れると思います。

特に、体調に不安を抱えるおじいちゃんを見てみると、何か楽しみを見つけて、心から打ち解けられる居場所があったらいいなと思います。それにはやっぱり浪江の皆さんとのふれあいが必要です。

商工会青年部の八島さんたちの「なみえ焼きそば復活」の取り組みをテレビで見ました。なつかしく、また私たちに勇気を与えてくれますね。請戸

のある年の冬、八島さんたちがサンタクロースを装い子

どもたちにプレゼントを渡してくれたことを思い出します。

少しずついいので、浪江町や周辺の町の映像を定期的に流したり、頑張っている人たちの様子を発信して欲しいです。また、避難している浪江の皆さんは、各地でどんな生活をしているのか。子どもをもつ親御さんたちはどんな悩みを持っているのかなど、皆さんのことが知りたいですね。

時間の経過とともに、ふるさとへのこだわりが薄れていくのではないかと心配です。今回の「浪江のこころ通信」は大切な取り組みだと思っています。取材をしていただき浪江のことを発信することで私たちのふるさとへの思いや安心、そしてみんなのつながりが保てるのではないのでしょうか。浪江という町を忘れないためにも。



▶坂本家の皆さん





群馬県

## 本田 由美さん

取材：高崎経済大学 櫻井常矢研究室  
櫻井・斉藤・内山

### 避難先の地域の皆さんとの 交流から元気をいただいています



▲本田さん(左)と看護師の大和田さん(右)

私は、群馬県東吾妻町で南相馬市の皆さんと一緒に避難生活を続けています。以前は120名ほどの避難者がいましたが、現在は20名ほどになり少し寂しくなりました。

避難先の皆さんの食事は、調理師免許を持つ私を含む3人を中心として自炊していましたが、それも私一人になりました。

娘と弟とは一緒に暮らしていますが、家族はバラバラのままです。

この避難所に常駐する浪江町出身で看護師の大和田純子さんはじめ、皆さんと助け合って頑張っています。大和田さんは、環境の変化に

ともなう避難者の皆さんの体調不良を心配されています。

先日、地元の方々の企画で南相馬の郷土料理を作る機会をいただきました。その中でも「晴れの日食堂」というイベントでは、食を通して地元の方と避難者との交流ができました。それがきっかけで、地元の皆さんと親しくさせてもらっています。生活用品を届けてくれたり、調理の手伝いをしていただいたり：感謝しています。ふるさとである浪江町のことを忘れたことはありません。いつか浪江に帰って、この苦しい時を乗り越えたことを皆でふり返って話せることができると願っています。



▲大和田さんは、避難所で避難者の健康体操を行っています。



新潟県

## 横山 俊勝さん

取材：くびき野NPOサポートセンター 植木

立野字坂下から震災後、津島、那須等を経て、義兄がいる柏崎市に避難。浪江町では10人の大家族。今は妹が栃木に嫁ぎ、両親は福島に戻り、祖父母と夫婦、3人の子どもたちとアパートで暮らす。パソコンが唯一の情報手段。浪江町や東京電力の情報確認は大事な日課。

妻の兄夫婦が柏崎市にいたので、親戚20人ぐらいで、車に分乗り自主避難してきました。

寒い時期だったのでまず購入したのが布団、その後、家具などは全て柏崎市の皆さんからの支援でそろえることができました。

そのとき、とても助かったのが「共に育ち合い(愛)サロン・むげん」というラーメン&雑貨屋さんの存在。個人で支援物資の取り次ぎをしてくれて、必要なものを2~3日で調達してくれました。福島からの避難だとわかると、「役立てて」と名前も明かさず1万円を差し出してくれた女性もいました。そのとき、みんなで食べたラーメンの味は忘れられません。おいしかった。

人情溢れる柏崎市の人たちに支えられて、日常生活は送れています。

親戚も徐々に福島の前仮設住宅などに戻りつつありますが、小学生の息子たちは新しい学校に慣れてきたので、自分たちはしばらくここで暮らそうと考えています。3歳の詩乃は、「しーちゃんのおもちゃおきつぱ

なしだよ」「ここは、お家じゃない、地震で壊れたのがお家でしょ」とまだ言います。

何より子どもたちのことを最優先に、これからの暮らしを考えていきたいと思っています。



▲アパートの前で。ずっと一緒だったサクラは一足先に福島へ戻りました。  
翔琉くん(小6)、拓海くん(小5)、詩乃ちゃん(3才)、愛犬サクラ



# 伊集院律子さん

3か月の間に避難場所を9か所も移動。現在は新潟県上越市内のアパートで両親、嫁、孫の6人暮らし。長男は仕事のため相馬市内に。



取材：くびき野NPOサポートセンター 渡辺

乳幼児と80代の両親が一緒なので自主避難を選びました。高齢者には遠距離の移動は体力的に辛い、ある程度したら我が家に戻れると信じていたので、避難地域ぎりぎりのところで避難を繰り返してきました。その結果、この3か月で避難場所を9か所も変え、ようやく2か月前に親戚が住む上越市に落ち着きました。

以前に住んでいたところは自然がいっぱい、音といえば鳥の鳴き声でしたが、ここは車の音が多く、最初はびくついていました。慣れないアパート暮らしのストレスに頭を悩ませていましたが、リサイクルショップに出かけたり、孫も公園で遊ぶようになり、少しずつこの地域にも慣れてきました。毎朝近くを通る幼稚園バスを見て「来年から幼稚園に通うよ」と笑っています。

小さい子どもがいるので健診や予防接種などの情報が得にくかったり、アパートなので地域との接点がないことが、少しさみしく感じています。

浪江町ではピアノを教えていて混声合唱団にも関わっていました。先日、団長が取りまとめた団員名簿が送られてきて、仲間からの便りにとても励まされました。

先行きが見えない不安の中、2人の孫の笑顔に支えられながらの生活。上越でもぜひ合唱をやりたいし、それを通じていろいろな人と交流できたらいいなと思っています。



▲アパートの前で孫の花奈ちゃん(3才)と真大くん(10か月)の笑顔に支えられて



新潟県

母が大切に  
つておいた20  
03年1月の「広  
報なみえ」には、  
息子が保育園の  
ときの集合写真  
が表紙になつて

地震が起きたときは動め先にいて自宅に戻っていないため、父母から話を聞いても家が流されたという実感がわかず、踏ん切りをつけるために6月4日に一時帰宅してきました。玄関の敷居と基礎だけ、あたり一面何も無く、学校がやたらと近く見えしました。自分の家に戻ってきたのに家を見る「目」が、まるで夢の中にいるような、「自分の目」で見ている感覚がなく、いまだに実感がないような感じでした。何でこんなことをしているのか、戻りたいのに何で逆に逃げなければならぬのか、という思いがかけめぐりました。

# 柴 恵美さん

取材：くびき野NPOサポートセンター 秋山

請戸から避難。サンシャインで一泊、翌朝のサイレンで逃げろと言われ津島へ。その後、夫と兄の仕事の関係で知っていた新潟県柏崎市へ。最初は声をかけてくれた海の家に身を寄せる。公営住宅に応募するも倍率が高く外れてしまい、自力で探したアパートへ。



▲先輩から譲り受けた制服を着て柏崎市の中学校へ  
あかね 亜華音さん(小5) (左)、駿斗くん(中1) (右)

いて、焼き増しして同級生に送ったとしても喜ばれました。携帯電話で撮った2月20日の安波祭のときの写真も。今回の震災で写真が全部流されてしまったので、本当に喜んでくれて…。

子どもたちには友だちができ、こちらの環境に順応し始めているので、子どもたちのためにはこのままの方が良いでしょうけど、最初は2、3日で戻れるものと思っていたので、ここに落ち着きたくない、やはり浪江に帰りたいという思いがあります。



▶ 駿斗くんが載っている「広報なみえ」



## 吉野 好志さん

取材：(特活)きらりよしじま  
ネットワーク 鈴木・笹木

### 笑顔で会える日を信じて

浪江町から、本人、妻、子ども2人、母親の5人で米沢市八幡原雇用促進住宅に避難している吉野さん一家。現在、吉野さんは、それまで勤めていた会社から解雇もされない「待機」状態のためアルバイトもできずにいるが、今、就職しても金額的に休職手当ての方が金額が良いという状況に戸惑いもあるという。



震災から2週間後の4月5日に、親友に誘われ米沢市営体育館に避難し、3週間ほど過ごした後、現在の八幡原雇用促進住宅に移りました。震災では津波によって会社や家屋、車を流されてしまいましたが、当日のうちに、バラバラになっていた家族と会えることができました。

現在は、17年間勤めた会社から「待機」と言われており、アルバイトもできない状況下にあるため今後の方向性が見えず、働けないことが一番つらいです。

今、こちらで就職してしまった方が良いのか、それとも「待った」方が良いのか。浪江町に戻れるのか、戻れないのか。戻れるとしても放射能の数値が高いうちは子どもの成育や生活を考えて戻ることほしきと思っています。

行政等に対しての要望や意見として、テレビで報道されている国の状況を見ると、政党がどうのこうのと

言っている場合じゃない、このような状況のときには協力しないといけないんだと強く言いたいですし、福島県の行政に対しても被災者に負担をかけないようにできないのか、と言いたいです。

私は全ての「モノ」を失いましたが、「家族」が心の支えです。「何とかなるさ」といった楽観視の部分も必要なのでは、と思います。また、すべての「モノ」を失くしてしまったからこそ「逆の強さ」があるとも思います。これもすべて、今までの人生の中で乗り越えてきた自分の気持ちや経験に伴う自信なのかもしれません。

ーブレスレットには、

「がんばれ！マリンパークなみえ ぼくたちはいつも共にいる」

の文字が入っている。ー



## 佐藤 眞敏さん

取材：(特活)山形の公益活動を  
応援するかい・アミル 齋藤

### なみえの美しい海岸線を 是非また散歩したい！

私たちは3月13日に山形市へ避難してきました。元々娘夫婦が山形市に居住していたので、津波で家は流され、そして浪江町が原発10km圏内ということで、年に10回程は訪れていた山形市に息子夫婦、それに孫を連れて避難しました。現在はアパートに入居して近隣で仕事をしながら比較的平穏な生活を過ごしています。山形県の対応は比較的素早く、現在のアパートの借り上げ手続きもスムーズに行なっていたいただきました。ご近所とは孫と同じぐらいのお子さん、そしてそのお母さんたち世代との交流もあります。それでも、やはり故郷の浪江町、そして私たちの住んでいた請戸地区へは、一刻も早く帰りたいと思っています。山形市内で山を見ると住んでいた景色を思い出します。特に毎日散歩していた海岸線の美しさや、小さいながら楽しんでいた家庭菜園の野菜や花々は今も心に焼き付いて離れません。そして夏涼しく冬暖かい温暖な気候と、おいしい「ほっき」めばる。そして



## 金澤 良行さん

取材：(特活)きらりよしじま  
ネットワーク 寒河江・井上

### 被害者となり、感じること



震災翌日に避難し、米沢市小野川温泉にて避難所生活を送っている金沢さん。米沢から仙台、南相馬を往復する毎日だが、7月には南相馬市のアパートに引っ越し予定だという。原子力発電所事故の正しい情報、浪江町の今後についての情報を求めている。

3月11日の地震当日、近くの避難所へ行きましたが、翌朝に避難指示があり、そのまま山形県米沢市へ避難して来ました。

避難当初は避難者受入れ準備もなく食料にも困りましたが、徐々に改善され、支援物資をいただきながら生活を送りました。

その後、米沢市役所の方から小野川温泉「河鹿荘(かじかそう)」を紹介していただきお世話になっています。現在は仙台に事務所を借りましたのでここから仙台まで通い、その帰りに妻がいる南相馬へ立ち寄り、河鹿荘へ戻るとい生活をしています。

今は、浪江町へは戻れるのかどうか、はっきりした情報が欲しいです。地元へ帰りたと思う方はお年寄りを中心に多くいると思いますが、新しく浪江町へ住みたいと思う人はいないと思っています。私も浪江町に戻り、再建したいという気持ちはありますが、戻れたとしてもお客さまがない、雇用もないことを考えると不安の方が大きいです。

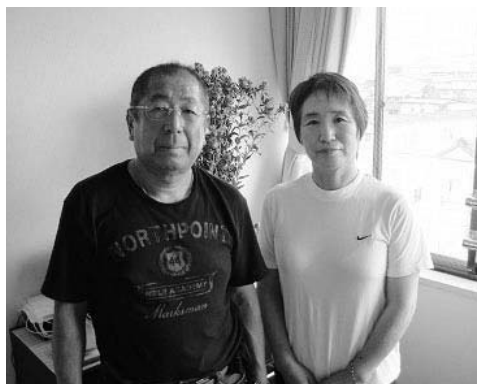
子どもの学費や生活費など経済的にも不安定な日々

で、避難生活にはいまだに慣れません。

原発事故に関しては、情報が錯綜しており、どの情報を信じたら良いのか分からなくなっています。

浪江町は「原発の町」のイメージがありますが実はそうではなく、実際は浪江町周辺の方々が多く原発に関わっていました。今回の原発事故により、私の人生が大きく変わってしまいました。原発事故による被害が予想以上に甚大であることをもっと多くの国民の方に知っていただきたいと思います。聞くところによると、東京あたりでは原発事故の事をそれほど深刻に考えていないようだ、といった話もあります。浪江町長もメディアに出て現状を訴えています、まだまだ足りないと感じています。

現在、引っ越し先の申請を行っており、順調にいけば7月には南相馬市にあるアパートに引っ越し予定です。今までお世話になった避難所の方々や米沢市役所の方、河鹿荘の方々など、山形の方はみんな温かくて大変感謝しています。今後、みなさんへお礼をしたいと考えています。



「かれない」などの海産物は忘れることができせん。また、毎年新年会を欠かさなかった組の12世帯の方々とは、是非再会を果たして、恒例だった古峰神社へのお参りへも行ける日を望んでいます。毎年2月に行われていた「安波祭」が、心に強く思い出として残っているので、何としても再開して欲しいと強く願っております。残念ながら、津波でほとんどすべてを失ってしまいました。一家の写真と卒業証書が後日見つかり、唯一生き残った物として、「お守り」替わりにと大切にしていこうとみんなで話しています。現在、浪江町の情報は友人との携帯電話を使った情報交換などを通じて得ており、この山形にも請戸から避難されている方もいらっしゃいます。私たち夫婦は5月にイタリアへの海外旅行を予約していたのですが、残念ながらキャンセルせざるを得ない状況になりました。それでも、原発が収束して心にゆとりが生まれたら、是非またゆっくり旅行したいと思っています。地区のみなさんと早く再会できることを強く願っております。



## 三原 優蔵さん

取材：(特活)きらりよしじま  
ネットワーク 高梨・井上

### 吾唯足知 (われただたるをしる)

地震発生とともに車で避難し、そのまま避難所生活となった三原さんご一家。避難してきてからは毎朝、上杉神社にお参りしている。願いが一刻も早く通じて欲しい。祈ることしかできない毎日だが、浪江町へ戻ることは決して諦めないという。



現在は米沢市のアパートで、本人、妻、母親の3人で生活しています。浪江町では、おもちゃ屋9割、自転車屋1割という商売をしていました。現在は、こちらで私と妻がアルバイトをし生計を立てていますが、大学生の息子がおり、経済面でとても心配しています。浪江町のお店のことを思うと、来てくださったお客さまにお会いしたいというのが一番に思うところです。

避難先として選んだ米沢市の避難所の方々や地域の皆さまは本当に良くしてくださって、改めて人の温かさを感じています。

浪江町は山がきれい海が近く、サーフィンのできるリゾート地です。鉄腕ダッシュのダッシュ村があるところとしても有名です。また、日本一、海に近い酒造会社があるところで、「寿」「天王山」「樂實」といった縁起の良い地酒があります。このような浪江町に一刻も早く戻りたい気持ちがありますが、現実として仕事もない、人もいない、下水も使えなくなっているという状況を考えて戻るとはなかなか難しいと思います。

浪江町での友人や会社関係者、親戚などとは連絡が

取れています。ただ、近所の方々などは各自バラバラに避難したので友人が近くになくて寂しい思いをしています。特に母親はそう感じているようです。

東京在住の娘(三原由紀子)が『壇歌』6月号に『人のさまざま』という作品を書き掲載されています。その中で「今声を上げねばならんふるさとを失う我がの生きがいとして」という一文に故郷を失うかもしれない不安な思い、そして、これ以上私たちと同じような思いをする人を増やしてはいけない、という思いが込められています。これは浪江町のみなさんの思いを表現していると思います。

現状はとても厳しいですが、友人、知人から支援物資を多くいただきました。生活用品や食料などどれも本当にありがたいものでした。妻は毎朝早く起き、上杉神社にお参りをしています。そこで知り合った方やご近所の方々に温かく接していただき、この震災で本当に人の縁が大切なのだ強く感じています。浪江町のみなさん、諦めないでいきましょう。



## 鈴木 卓さん

取材：(特活)山形の公益活動を  
応援するかい・アミル 齋藤

「安波祭」「出初式」  
請戸の伝統行事を  
是非守りましょう!

震災後、私たちは「いこいの村」へ避難しましたが、その後の原発事故を受け、南相馬市原町区の実家、飯館、そして友人のネットワークを通じて新潟や山形の情報を得る最終的には山形県に避難してきました。当初は山形市の総合スポーツセンターに避難、その後、天童市の旅館に二次避難しました。高齢者がいるので、やはり食事と風呂の心配が大きく、この天童温泉を避難先を選びました。私自身は、やはり就労が一番心配なので、ここ山形だけではなく、東京方面でも仕事を探しています。雇用形態を選ばなければ、いくつか仕事はみつかるのですが、きちんとした仕事となると難しいのが現状です。まずは自分たちの生活基盤を作ることが最優先だと考えています。

震災後心残りなのは、12日に原発事故が明



## 中西總一郎さん

取材：(特活)きらりよしじま  
ネットワーク 小形・原田

### 前に進む決心

震災数日前に生まれた孫を連れて山形県南陽市に避難されている中西さんご一家。被災しているながらも、一刻も早く仕事を通して、復興の手伝いしたいと願う。「阪神大震災は他人事」だったという中西さん。生まれたばかりの孫に浪江町の美しい風景を早く見せたいという。



震災翌日の3月12日に福島原発事故による避難指示により、山形市内の知人アパートに家族5人で避難してきました。その後、南陽市にあるアメリカンビレッジ（トレーラーハウス）を知り移動、長期間の避難に備えました。孫は、震災数日前に生まれたばかりで、病院から原発からすぐ離れるようにとの指導があり退院してすぐ山形に避難してきました。滞在中、南陽市で赤湯温泉 桜湯さんで大浴場を避難者に開放していることを聞き立ち寄った際、桜湯の女将さんが「赤ちゃんがいてトレーラーハウスは大変でしょう」とのことで南陽市役所に問い合わせしてくださり、避難所として桜湯に滞在できることとなりました。女将さんのお父さんが浪江町出身であったこと、孫の名前が「桜子」という縁があったのかもしれない。深く感謝しています。

震災では、義理の母と兄が津波の犠牲となりました。兄の確認はまだ取れませんが、母はDNA鑑定で本人確認ができ、葬式をすることができました。母が見つかったことを区切りとして、前に進む決心をし、それまで経営してきた会社を福島県二本松に仮社屋を置き、

再建に向けて取り掛かっている状況です。

地震直後から近所の人や消防などみんなで不明者の搜索活動をしていましたが、12日に避難指示が出され、仕方なく搜索活動を止め避難してきました。もう少し搜索していたら、もしかしたら助かった命があったかもしれないということが心残りでなりません。原子力被害がなければ搜索もできたし、避難する必要もなかった。これが原子力被害の恐ろしさであり、ひどいところです。二度とあってはならない事故だと思います。

今思えば阪神大震災は、もしかしたら「他人事」だったのかもしれないという思いがあります。今回の震災を経験して、人と人の助け合いの心の必要性を強く感じました。じっとしてはならない、動かなければダメ。一日も早く復興して、恩返しをしたいと思っています。

私にとって浪江町はかけがえのない故郷です。海、山があり、海産物もおいしいし、山菜もおいしいところです。B-1グルメでも有名になったなみえ焼きそばもおいしいのです。一刻も早く、元の浪江町の姿に戻しましょう。



らかになり、すぐにでも救助に入れば助かったかも知れない津波被害の方々を救えなかったことで、消防団員でもあった自分としては、何とも言えない無力感を感じています。せめて、相馬市の遺体安置所や居住していた地区にマイクロバスでも一時帰宅できる回数を増やして、お線香でもあげたいと強く願っています。

浪江は農業と漁業の町。今はちょうど作付けの時なので、家業で「こしひかり」や「ひとめぼれ」などを作付けしていたのを懐かしく思っています。懐かしいと言えば、2月第3週の「安波祭」や全国的にも珍しい1月2日の出初式もまた、是非参加してみたいものです。前年度の漁獲高で名誉をかけての出初式は強く思い出に残っています。もともと請戸は浜手なので、口は悪いが気は優しい地区。今はゼロからのスタートですが、いつかきつと同級生、消防団の仲間、子どもたちを通じた友人たち、そして隣組の人たちと会える機会を楽しみにしています。自分が旗振り役になっても1年に1回、2年に1回でも良いので、何とか実現したいものだと考えています。